

古代における津の都市的様相

鬼頭清明

-
- | | |
|--------------------|-------------------------|
| 1. 問題の所在 | 4. 国府付近の津とその集住区－加賀国府の場合 |
| 2. 文献史料にみえる津 | 5. 農村的津－伊場遺跡の場合 |
| 3. 京に近接した津－泉木津と山崎津 | 6. 結びにかえて |
-

論文要旨

日本における都城や国府などの政治的につくられた非農村的世界のありかたを考える上で、人々の定住形態として、拡張した都市の世界と農村との接点となる具体的な対象を選んで、検討してみることにした。検討の対象として、国府交易圏を構成する地方の津をとりあげ、その定住形態とそこにみられる生活様式について検討し、そこにおける非農村的世界の存否を考えてみたい。その場合、全国各地にある津はそれぞれに歴史的発生の条件を異にしていると考えられ、津ごとにことなる性格が検出されることが予想される。そこで、本稿では、京に近接した津として泉木津と山崎津、国府付近の津として加賀国府付近の津、農村的津として伊場遺跡の三類型にわけて、主として津との関連で問題となる非農村的世界のありかたを検討したのである。その結果、次のような点が明らかになった。

都城の付近の津については、都城に規制されたものではあるが、生活形態として非農村的、都市の世界が認められ、平安京に接する山崎などでは10世紀以降、都市の端緒的なものへと変質していく傾向が認められる。一方、国府付近の国衙交易圏の中核となる国府とその付近の津に規定された領域でも非農村的の世界が出現しており、地方の有力者層の集住区として成立していた可能性がある。このように都城や国府の付近には、単に行政的施設のみではなく、交易に関連した集住区が成立していたことが推定できる。また、郡家や駅家などの付近でも地域的に交通の至便な地域では、伊場遺跡のように津の機能を中心に非農村的の世界が、ある程度形成されうる場合も想定できそうである。

今後の課題として、都市と農村との間の中間的集住形態を検討することによって、日本古代における都市と農村の問題点を、もう一度整理することができるのではないかと考える。